

徐渭の代応制詞16首について（その3） — 硯，筆，墨，劍の詞—

村田 和 弘*

Study on Xu Wei's sixteen pieces of "Ci" poetry. (III) — Poetry of Ink stone, Brush, Ink and Sword —

Kazuhiro Murata *

Received October 31, 2008

Abstract

Xu Wei (徐渭) was an artist who was famous as a painter, a calligrapher and a drama writer in late Ming dynasty. But it is not known that he leaves poetry as a poet very much, and it did not almost attract attention till now among other works that he wrote "Ci" (詞) poetry. As for his "Ci", 28 poems exist in all, and 16 poems are works by a ghost writer of "Ci" in response to an order of the emperor. I give translation with notes and interpretation to 4 poems that described ink stone, brush, ink and sword here and want to be based for study of Xu Wei literature.

1. はじめに

前2稿¹⁾において、徐渭の代応制詞16首の中から、それぞれ(1)「日」(2)「月」(3)「風」(4)「雲」詞4首と、(5)「霜」(6)「雪」(7)「山」(8)「水」(9)「霜」(10)「雪」(11)「秋」(12)「冬」詞8首について検討を加え、訳注を施してきた。本稿では残り4首について、引き続き訳注を加えながら詞の語句の背景を検討し、代応制詞16首訳注の試みのまとめとしたい。

4首の詞題はそれぞれ(13)「研」詞(研は硯に同じ)(14)「筆」詞(15)「墨」詞(16)「劍」詞であり、文房趣味²⁾がこの4首の枠組みとなっていることがわかる。硯・筆・墨・紙は文房四宝と呼ばれ、文人の愛玩する文房清供である。その中から硯・筆・墨の3つが詞題として立てられ、紙の代わりに劍がテーマとなっている。なぜ紙ではなくて劍なのか、その徐渭における内在的な理由については「劍」詞のところであらためて論じたいが、外在的理由としては、明末時期において劍が文人の愛玩品として文房四宝と並列されることは一般的であった

* 未来創造学部
School of Future Learning

ことが挙げられる。例えば明末に『長物志』という書物が編纂されている³⁾。この書物は題名の示す通り、無用の長物ではあるが、愛蔵し鑑賞するための物品をまとめて解説を加えた、明末におけるカタログ文化の一つの典型的な出版物である。その巻7器具に、「研・筆・墨・紙・劍」という項目が見える。これは徐渭の「研・筆・墨・劍」というテーマ選択と同一である。『長物志』は、その編者である文震亨（1585-1645）の名ゆえに有名である。文震亨は蘇州の名門、文氏一族に連なる人物であり、市隱として名声を縦にした文徵明（1470-1559）は曾祖父に当たり、兄震孟（1574-1636）は状元合格者である。生没年から見ると、徐渭は文徵明よりも1世代下で、『長物志』編纂はその徐渭没後の1世代後という関係になる。蘇州の文人気風と同質の趣味を徐渭が共有していた証左であろう。ともあれ、これら4首のテーマは文人の愛玩物、広い意味で文房趣味としてまとめることができるだろう。

ところで、『長物志』に至るまでも、このような文房趣味を含んだ編纂書は出されていた。少し話は逸れるが、この点についてまとめておこう。

書齋の清供として筆・硯・紙・墨を愛玩する文房趣味の盛行は、まず南唐の李後主により広まったとされる。その後、宋代に趙希鵠の『洞天清祿集』によりエッセンスがまとめられ、それ以降の編纂物の規範となる。そして明初の曹昭の『格古要論』を経て、明末には高濂の『遵生八牋』や屠隆の『考槃余事』が現れ、そして文震亨の『長物志』へと、その洗練の度を加えていく。徐渭が代応制詞を書いたのは、すでに前稿、前々稿で述べたように万曆即位後、北京の張元忭の屋敷近傍に滞在した万曆8年から10年の間であろうと推定される。そして『遵生八牋』が万曆19年の成立、『考槃余事』はそれを継承する編纂書であり、『長物志』の成立はさらにそれから遅れる⁴⁾。つまり徐渭の詞に見える表現は、これら明末の書物に先行しており、明末の風潮を先取りしたものとなっていることが注目されよう。

さて、4首の大きなテーマが文人の文房趣味だと性格付けられるとすると、16首全体の構成を見たときに、そこに「天地人三才」という構成意図が浮かび上がってくる。すなわち「日・月・風・雲・秋・冬・霜・雪」が天文をテーマとする詞、「山・水」が地理をテーマとする詞、そして今回検討する「研・筆・墨・劍」が文人の文房趣味すなわち人文をテーマとする詞である。「天地人三才」を分類の部立てとする書物としては『三才図会』という百科全書がある。『三才図会』は万曆35年（1607）の王圻「三才図会引」、万曆37年（1609）の周孔教「三才図会序」を冠し、その体裁は巻頭から天文・地理・人物と並べ、次いで時令・宮室・器用・身体・衣服・人事・儀制・珍宝・文史・鳥獸・草木と続く。なお時令というのは暦占のような内容であり、季節とは別。その序文に「上は天文より下は地理に至り、中は人物に及ぶ。礼学経史に精しく、宮室舟車に粗く、幻にしては神仙鬼怪、遠くは弁服鳥章、珍奇玩好に重く、飛潜動植に細かし⁵⁾」と評するように、天文・地理・人物が中核をなし、その他がこれを補足している。ちなみに筆・墨・硯は器用巻12什器類に、劍は器用巻6兵器類に収められている。徐渭はこれらを広く人文と捉えたのであろう。もちろん徐渭の詞の方が『三才図会』よりも先行するのであるが。もしこうした理解が妥当であるならば、徐渭は16首で世界の表徴を詠歌し尽くすという意図を初めから持っていたことになる。それは応制の作品としてまことにふさわしい構成意図ではないだろうか。つまり本稿では人文の表徴としての文人の愛玩物を詠む徐渭の心性及びその語句の背景を探ることが目的となる。なお詞の引用に際しては、これまでと同様に、押韻箇所を○印で示す。

2. 「研」「筆」詞2首の訳注

13) 研

深洞篝灯，古坑懸綆，蒼銅紫玉璘玕。鑿取帰来，湿雲一片猶津。漳河雀瓦，海島鼃磯，良材併值千金。明窓下，丹鉛随染，歲月侵尋。 総取，鉄就磨穿也，若尋行数墨，無補経綸。取法端方，任教緇涅常新。禁園久罷名園賞，再休論，捧向詩人。更一種，製成鼎様，万年同鎮周京。

「硯」

深い洞穴に篝火を焚き，古い堅穴の坑道に釣瓶の繩を懸ければ，蒼銅や紫玉が美しい玉のように連なる。鑿で穿ち取り持ち帰って来ると，湿気がまだうっすらとあり潤っている。漳水のほとりから出土する銅雀の瓦や，海上の鼃磯島に産する石など，良材はなべて値千金。明窓の下，丹鉛の朱色がしだいに，歳月に従い染みこんで行く。

やはり，鉄も磨けば穿たれるというが，たとえ数墨を磨り減らしたとしても，経綸を補うことはない。正しいやり方を取れば，黒い土を常に新しいままにしておける。宮中の庭園では久しく名園の賞玩をやめており，言うまでもなく，捧げ持って詩人に向かうことはない。さらにまた，鼎のかたちには製作されれば，いつまでもとこしえに都を鎮めん。

まず硯をテーマとする詞であるが、『徐渭集』の中からは以下のような硯銘13首を得ることが出来る⁶⁾。

- 1 「歛石硯銘併序」（「出歛西門，歩長橋，望黄山群峰挿天如天戟。入門就小肆，用錢二百五十貨得此石，雲紋而宝沙，照日中瑟瑟若東夷所鑿屏扇，然以墨易膠，稍乾為磁吸鉄，龍尾之佳者也。時王仲房賞之曰，軫博可得錢千五百。久之，歛客從獄中持帰為余歛，両基而復璞以來，余將寄斲於吳，而先銘之如左」）
 - 2 「歛石硯銘2首」（「俱金星玄色」）
 - 3 「端石銘2首」
 - 4 「端石魑硯」
 - 5 「端石無眼者」
 - 6 「馬策之端研銘2首」
 - 7 「鼃磯研銘2首」
 - 8 「鼎研銘」（「硯面団，徑尺，沼寸，亦団而横，墜背之足極短」）
- 以上8首，『徐文長三集』卷22銘
- 9 「端溪硯銘」（「先生攜入獄中者」）
 - 10 「中硯銘」
 - 11 「鼃磯研銘」（「面有四星似箕，其二没於池，而底則七，儼然北斗列次。以其常不見也，故戲之。用僧張一行事」）
- 以上3首，『徐文長逸稿』卷18銘
- 12 「龍尾硯銘」（「額有魑文」）

13 「硯銘」

以上2首、『徐文長佚草』巻2跋贄銘記

ここに挙げられた端石とは端溪硯のことで、現在の広東省肇慶市から産出する石で作った硯のこと。また歙石硯は龍尾硯ともいい、婺源（現在の江西省婺源县）の歙山の龍尾溪（歙県は現在は安徽省黄山市に属する）から産出する石で作った硯を指す。端溪硯と歙石硯はともに名硯として名高く、『洞天清祿集』以下の編纂書にそれらの収蔵・鑑識の知識が記されている。これらの硯銘の存在から、徐渭が硯の収蔵家であり、歙硯・龍尾硯や端溪硯といった名硯はむろんのこと、鼈磯硯のようなマイナーな硯まで所蔵していたことが知られる。ここで注目に値するのは、1「歙石硯銘併序」に附された序文と、9「端溪硯銘」の注の内容である。9の注には「先生が獄中に携え入ったもの」とあり、徐渭が獄中へこの端溪硯を携帯したことがわかる。また1の序文には当時の硯を巡るやりとりが描かれていて興味深い。一部正確には意味を掴みかねる部分もあるが、序文を訳してみる。

歙県の西門から出て、長橋を歩き、黄山の群峰がまるで戟のように天に突き刺さっているのを眺めた。門を入れてすぐのところ小さな店があり、250銭の金額でこの石を買った。雲紋が見え金属質の星が浮いている。日に照らすとふかみどりを呈し、東夷のいわゆる鬚屏扇のようである。そうして膠の代わりに墨を用いており、やや乾くと磁石のように鉄を吸い寄せる、龍尾石の良いものである。あるとき王仲房がこれを褒めて、「転売すれば1,500銭を得ることができる」と言った。しばらくして、歙県の商人が獄中から持ち帰り私の為に彫琢してくれようとしたが、ふた月ほどしてそのまま戻ってきたので、わたしはこれを呉へ彫琢に出そうと思い、先に次のような銘文を書いた。

徐渭が徽州歙県に遊んだのは、序文の内容より妻殺害による下獄より以前であることは確かであるから、おそらく嘉靖41年（1562）のことであろう⁷⁾。この序文からは、さまざまな情報を読み取れる。徐渭が硯の石の良し悪しに関して知識を有していたこと、当時、硯の彫琢を商売として各地を回る商人がいたこと、文人たちも硯の石を売り買いたこと、石の値が上がるというような話を日常的にしていたこと、また徐渭がこの歙石を獄中へ持って入っており、獄中から製品化に出していたこと、などである。

次に、「研」詞にいかなる語句が使われているかを検討していこう。前闕起句「深洞篝灯」の「深洞」とは、硯を製作する石を掘削するために掘った洞穴をいう。「篝灯」は、かがり火を焚きながら深い洞穴を掘り進み、良材を捜し求めること。なんの変哲もない語句だが、例えば『洞天清祿集』「端溪下岩旧坑」に「石居水底，須千夫堰水，汲尽深数丈，篝火火下，深入穴中，方得之」とあるのを踏まえている⁸⁾。次の「古坑」も、こうした端溪石を掘る洞穴に旧坑と新坑とがあり、そのうちの旧坑を指す。やはり『洞天清祿集』「古硯弁」によれば、端溪には上中下の三岩があり、また旧坑と新坑とがあることが述べられている。後の『長物志』巻7器具「研」では、それまでの編纂書を踏まえて「研以端溪為上，出広東肇慶府，有新旧坑上下巖之弁，石色深紫，襯手而潤，叩之清遠，有重暈青緑小鸚鵡眼者為貴」と概括している⁹⁾。「蒼銅紫玉璘珣」とは、こうした旧坑で掘出された石の色を形容したものであり、青・緑・紫

は色合い、玉は「細潤如玉」（「端溪下岩旧坑」に見える語）と形容される石の肌理を詠む。「璘珣」の璘は、玉につらなつた模様のあるさま、珣は珣玗琪という、東方に産する玉の名である。「濕雲一片猶渾」というのも「潤」と形容される石の特質をいう。

ここまでは端溪石についての表現である。次句からは、それ以外の硯を詠む。「漳河雀瓦」の漳河は漳水のこと。山西省に発し河北省に入り衛河と合流する。漳河に臨する河北省の臨漳県に魏の曹操が銅雀台を築いた。「雀瓦」は、その遺跡から出土する銅雀台の瓦を硯に用いた銅雀瓦硯を指す。宋の唐詢の『硯録』「古瓦硯」によれば、「好事者は骨董物としてすこぶるこれを愛重する」と記されている¹⁰。「海島鼃磯」という硯の産地はよくわからない。鼃はワニのこと。山東省蓬萊の北にある鼃磯島で産出する石を用いて硯としたと考えられるが不明である。やはり唐詢『硯録』に「登州駝基島石」の項目があり、鼃磯と駝基は同音であること、また蓬萊と登州も同じ地名であることから、おそらく同一の産地の石を指すのであろう。

「明窓」は明窓浄机、きちんと整理された清らかな書齋のこと。「丹鉛」は、書物の校訂に用いた、丹砂と白鉛粉を混ぜた赤インクを指す。読書とは、近代以前は、なによりも書物の文字の校訂をすることであった。「随染」といい「歲月侵尋」というのは、『考槃余事』「硯箋」や『長物志』巻7「研」にいうところの「墨繡」についての表現であろうか。例えば『長物志』「研」には「惟研池辺、斑駁墨跡、久浸不浮者、曰墨繡、不可磨去」と見えており、硯池に染み付いた墨の跡の、内側に染みこんだものを墨繡と呼び、無闇に削り取ってはいけないことを述べている。なぜなら『考槃余事』「硯箋」によれば、墨繡は古硯のしるしだからである¹¹。

後関冒頭は、しかし玩物喪志では「経綸」、すなわち天下を治める役には立たないことを述べる。「取法端方」は正しく方法を取り行うこと。もちろん硯の四角形からの連想であろう。「緇涅」の緇は黒く染まること、涅は黒土にまみれさすこと、ここでは墨の黒色に染まることをいう。『論語』陽貨第19に「子曰、……不曰堅乎、磨而不磷。不曰白乎、涅而不緇」¹²とあるのを踏まえつつ、その逆に黒ずむに任せながら常に新しい発色を見せる、とひねりを加えている。「鉄就磨穿也」というのも、『論語』陽貨に見える「磨而不磷」の句を逆手に取った表現であろう。「禁園」は宮中の庭園。名園鑑賞の雅風が久しく絶え、そこで詩人たちが筆を取って詩を競作することもなく、硯が奉げ持たれることもない。だが鼎型の硯は周の都を治める宝器のように都城北京を鎮める。鼎型の硯についても、『硯録』「硯の形製」の項に「鼎足の如きもの」として見えている。徐渭の硯銘にも8「鼎研銘」があり、その注に「硯の面は丸く、径は尺、沼は寸、また丸くして横長、硯を支える足は極めて短い」とある。

このように見てくると、徐渭が「硯」詞を書くに際しては、それまで自身が収蔵していた硯にまつわる経験と知識を基にして作詞していることがわかる。つまり硯の一般論を語っているように見えて、実は相当プライベートな内容の詞なのである。

14) 筆

夢裏生花，書辺飛巷，長鬚果是通神。作伴云誰，都来席上儒珍。蟾蜍玉滴，鸚鵡金睛，兼取松麝溪藤。併付将，雄豪管領，一掃千軍。記得，甘泉曾載取，正逢校獵，作賦凌雲。小可雕蟲，馮他帶草連真。而今幸薰龍池水，運宸章，画鉄鉤銀。笑昌黎，為譜中山，却首羸秦。

「筆」

夢の中で花を咲かせる筆は、書の周囲を走るように飛び、さすが長い鬚は神に通じる。お伴は誰かと言えば、みな席上の儒者の珍品ばかり。ヒキガエルの玉の水差に、ハッカチョウの金眼のある硯、さらに麝香の佳墨と藤の剝溪紙も揃える。それに併せるのは、雄豪な筆遣いの筆管、ひとたび振るえば千軍を掃く。

憶えているのは、かつて甘泉で捕らわれ、ちょうど巻き狩りに出逢い、健筆を振るって詩を賦したこと。末技の詩だが、筆のおかげで行草書の体をなす。今幸いにも龍の硯池の墨水に筆を浸し、天子の筆をめぐらし、見事な筆跡を描く。韓愈を笑う、中山の人（筆）の為に伝記を作り、かえって秦の長官とするを。

前関冒頭の「夢裏生花」は夢の中で花を生み出すということだが、筆を指す。花とは美しい文章のこと。黄山に「夢筆生花」という名の奇岩があるといい、「生花之筆」という言い方も一般的にある。「筆」を当てさせる一種の言葉遊びである。「長鬚」は長い鬚すなわち毛筆のこと。「書辺飛巷」は文字を記していくときの筆の動きの形容と解釈できよう。

「儒珍」の珍は「席上之珍」すなわち机上の珍品のこと。普通は儒者の学徳の喩えとする語だが、ここでは文字通り机上に筆と共に並べられる文房具を指す。ここでは、筆とともに文房四宝と呼ばれる硯・墨・紙と、硯池に水を足す水差の4つが挙げられている。以下に1つずつ見ていこう。

「蟾蜍玉滴」の玉滴とは、玉の水滴すなわち水差のこと、蟾蜍はヒキガエルのこと。つまりヒキガエルの形をした玉製の水差を指す。水差は水滴とも硯滴ともいう。ヒキガエルの形をした水差については『洞天清禄集』「銅水滴」に言及があるが、ヒキガエルが口に小鉢を銜えているものは、古人が油を入れて燈火をつけるのに用いたもので、これを水滴に用いるのは机上の玩具とするに過ぎないといい、高い評価を与えていない（「今所見銅犀牛天禄蟾蜍之属口啣小盂者、皆古人以之貯油点燈、今誤以為水滴耳、正堪作几案玩具」）。中田勇次郎の訳注本には、玉が水滴に適していることをいう条があるが、『四庫全書』本には見えない。『長物志』巻7器具「水注」の項には「古銅玉俱辟邪、蟾蜍天鵝天鹿半身鷓鴣杓鏤金雁壺諸式滴子一合者為佳」とあり、ヒキガエル型を排除していない。なお玉蟾蜍を水滴として用いた早い例としては、漢の劉歆撰、晋の葛洪集とされる『西京雜記』巻6に「晋靈公冢……唯玉蟾蜍一枚、大如拳、腹空、容五合水、光潤如新、王取以盛書滴」という記述が見える¹³⁾。

「鸚鵡金睛」の鸚鵡とは、ハッカチョウのこと、和名は八哥鳥。ムクドリ科の鳥で、全身が黒く、くちばしと足は黄色、羽根に白い斑紋がある。硯の鑑識において硯の面にハッカチョウの黄色い目のような眼（鸚鵡眼）を持つものを珍重する。「金睛」とは、その黄色味があった鸚鵡眼を持つことを指す。

「松麝」は、松材を燃やした煙を集めて墨を作り、そこに香り付けとして麝香が混ぜ合わされていることをいう。墨の製法については後述するが、膠に麝香を混ぜた墨については、例えば『遵生八牋』巻15「燕閒清賞牋」の「論墨」の項に、韓熙載の所蔵品として「墨名玄中子、麝香月龍煤」が挙げられている¹⁴⁾。

「溪藤」は、剝藤紙を指す。藤を材料として作る紙であろう。『長物志』巻7器具「紙」では藤白紙と呼ばれている。浙江省剝溪で産するものが最も知られる。宋の『負暄野録』巻下

「論紙品」に「古称荆藤，本以越溪為勝，今越之竹紙甲於他処，而独推撫清江」と見える¹⁵⁾。

「雄豪管領」の豪は毫と同音。毫は、細い毛の意味から、筆を指す。管領は、管轄の統領のことだが、ここでは筆の管の意味をかける。雄傑豪快到千の敵軍を追い払う指揮官の様子と、毛筆を束ねる筆管による雄雄しい筆遣いのイメージとを重ねている。

このように前関では、筆を題としながらも文房四宝と水差を並べて儒者の机の上の文房趣味の典型を示し、用語集としての全体像を追及している。繰り返すが、明末の諸編纂書より時間的に先行しているにも関わらず、ほぼ同じ用語が見て取れるのは、そうした文房趣味の用語の踏襲関係の中に徐渭も居たことを示している。

次に、後関の「甘泉」は、酒のような味のする泉、醴泉のこと。ここで「校獵」すなわち柵で囲い狩猟をする巻き狩りに遭遇し、「凌雲」の筆を振って詩を賦したと述べる。凌雲とは雲をしのぎ高くそびえるさまであるが、唐の杜甫の「戲為六絶句」に「庾信文章老更成，凌雲健筆意縦横」¹⁶⁾と、庾信の健筆を賞賛する句が見えることから、ここでは詩文の才能の高いことをいう。あるいは文字通り筆を振って字を書くことをいうのであろうか。「彫虫」とは、詩文をつくるのにこまかい技巧をこらすこと。「帶草連真」の帶草とは、草書風に書くこと。連真とは、真書（楷書）を続け書きにした書体すなわち行書のこと。つまりこれは徐渭の得意とした行草書体のことをいう。つまり詩をひねるのは末技にすぎないが、徐渭自身最も得意とする行草書体により書き出された書作品は、皇帝の御覧に入れるに足ることを述べている。だとすれば先の「凌雲」とは、やはり文字通り毛筆を動かすことである。

このように毛筆の動きに焦点があてられている表現であるならば、「龍池」とは、皇帝の庭園の池ではなく、皇帝御用の硯の硯池を指す。皇帝の硯の使用を許されて代制詞を制作するという場面を仮構して描いていると考えてよいだろう。「硯」詞では、最近御苑で詩会が開かれなくなり、硯が捧げ持たれることもなくなったことを述べたが、ここでは逆にそのような晴れがましい場面を想定しているのである。「蘸」は、水などの液体に浸すという意味だが、龍池の水すなわち墨汁に毛筆の先端を浸して墨汁を筆に含ませることをいう。「宸章」は宸翰と同じく、天子の使う御筆。「鉤銀」は銀鉤を押韻のために顛倒させた語句で、銀のかぎという意味だが、筆跡の上手なさまを喩えていう。

末尾は、唐の韓愈の「毛穎伝」を踏まえた表現である。「昌黎」は韓愈の号。出身地を昌黎と称したことによる。「毛穎伝」は、韓愈が毛筆を擬人化して書いた文章。その冒頭部分は以下のようなものである。詞の語句と関連する個所に下線を引く。

毛穎者，中山人也。其先明眛，佐禹治東方土，養万物有功，因封於卯地，死為十二神。嘗曰吾子孫神明之後，不可与物同，当吐而生。已而果然，明眛八世孫鬻，世伝当殷時居中山，得神仙之術，能匿光使物，竊恒娥騎蟾蜍入月。其後代遂隱不仕云。……秦始皇時，蒙將軍恬，南伐楚，次中山，將大獵以懼楚。召左右庶長与軍尉，以連山筮之，得天与人文之兆。筮者賀曰，今日之獲，不角不牙，衣褐之徒，缺口而長鬣，八竅而跖居，独取其鬣，簡牘是資，天下其同書，秦其遂兼諸侯乎。遂獵困毛氏之族，拔其豪，載穎而焜，獻俘于章台宮，聚其族而加束縛焉。秦始皇使恬賜之湯沐，而封諸管城，号管城子……累拜中書令，与上益狎，嘗呼中書君。上親決事，以衡石自程。雖宮人不得立左右，独穎与執燭者常侍，上休方罷¹⁷⁾。

「中山」は、「毛穎伝」の中で毛穎の出身地を「中山の人なり」としていることを踏まえる。なお中山は、先秦時代の中山国のあった場所で、現在の河北省定州。「嬴秦」の嬴は、秦王室の姓。伯嬴が舜・禹に仕えて嬴姓を賜り、古代の秦はその子孫と称し、秦の王室も嬴を姓とした。「毛穎伝」では、引用にあるように、秦の將軍蒙恬が中山国を攻略し毛穎を俘虜として宮中に連行し、その後、毛穎は始皇帝に重用され、中書令を拝するまでに出世する。「首嬴秦」とは、中書令として官僚のトップの座に就いたことを踏まえている。この「毛穎伝」の引用部分を見ると、多くの語が「筆」詞に取り込まれていることがわかる。順に列挙していけば「長鬚」「通仙」「管領」「載取」「校獵」などが、それぞれ下線を附した箇所を踏まえていることがわかる。つまり徐渭の「筆」詞は、韓愈の「毛穎伝」をいわば本歌取りした作品となっているのである。その中で、徐渭の創作に係る語句は、文房具についての列挙と、得意とする行草書体についてだけといてよい。だが、それでもあえて「韓愈を笑う」と表現するのは、韓愈は、秦の將軍蒙恬が筆を發明したとする説（「蒙恬造筆」を『博物志』より引く記述は、各書に見られる）に基づき、筆を秦の始皇帝に仕えるものとして仮構してしまった、だがこれは筆への冤罪に近く、自分はこれを万曆帝に上程するのだ、という意気込みがあったからではないだろうか。

3. 書軸の現存する「墨」「劍」詞2首の訳注

(15)「墨」詞と(16)「劍」詞の2首には、徐渭の自筆による書軸が現存している。「行草応制詠墨」ならびに「行草応制詠劍」の2軸で、ともに縦352cm×幅102.6cmという巨幅である¹⁸⁾。その筆遣いは端正とは言い難いが、見るものを圧倒する力強さを持つ。従来は書作品としてのみ鑑賞の対象とされてきたが、ここではそれらを徐渭の文学として読み直してみたい。

15) 墨

侯[○]拜松滋，守蕪[○]楮郡，絳人[○]品秩多般。龍[○]剂犀膠，収[○]来共伴灯煙。煉[○]修依法，印証隨人，才成老氏之玄。是何年，逃却楊家，歸向[○]儒[○]辺。紅[○]絲玉版毫霜畔，苦分分寸寸，着意磨[○]研。呵来滴水，幻成紫霧蛟蟠。有時化作蒼蠅大，便改[○]粧道士衣冠。向吾皇，万歳山呼，寿永同天。

「墨」

ここに松の恵みを拝し、楮紙に長官たり、絳人の階級は各様。龍骨、犀角、膠を調合し、併せて焼煙の共をする。練り鍛えるは法に依り、正しく行うは人に従い、はじめて奥深い黒となる。いつからか、墨子が楊朱と離れ、儒者の机上に帰したのは。

紅絲硯、剝紙、白筆の傍、ちょうどよい程合いに、懸命に硯を磨く。擦れば水を垂らし、幻のように現れるは紫霧に蛟龍の蟠姿。時として細字と化し、道士の衣冠を整える。吾が皇帝へ、万歳山呼し、天と同じく長寿ならんことを。

前関の初めは、「筆」詞に引き続き、韓愈の「毛穎伝」を下敷きにする。「絳人」とは、絳県（現在の山西省運城市絳県）の人のことだが、「毛穎伝」によれば、それは陳玄という人物であ

る。以下、先ほどの「毛穎伝」の続きを引用する。

穎与絳人陳玄，弘農陶泓，及会稽楮先生友善，相推致，其出处必偕。

毛穎と絳県の陳玄，弘農の陶泓および会稽の楮先生は親しく，相手を立て合い，出仕するのも退出するのも，いつも行動を共にした，という内容である。陳玄という名前は，玄が黒色を指す名詞で，陳はつらねるという動詞であるから，黒色をつらねるという意味となり，墨を連想させる命名である。他の登場人物を見ると，毛穎は，むろん毛筆の擬人化。陶泓は，泓が水の広くて深いという意味から陶硯を指し，楮先生は楮紙のことであるから紙を指す。「其の出处を必ず偕にする」とは，文房四友が常に一緒に机上に置かれることを比喩的に述べるものである。

詞の他の部分は，明代における墨の製法を詠んだ表現である。例えば崇禎10年（1637）の著者宋応星の序を持つ『天工開物』を見ると，その巻下，丹青第16巻「墨」の項に墨の製法を載せている。それによると，墨には松を焼いた煙で作る松煙墨と，油を焼いた煙で作る油煙墨とがあり，多くは松煙で作る墨であるという（「凡墨燒煙凝質而為之。取桐油清油猪油煙為者居十之一，取松煙為者居十之九」¹⁹⁾）。詞の冒頭で「侯拜松滋」というのは，松煙を用いて墨を作ることを言うのであろう。『遵生八牋』巻15「論墨」の項に「松滋侯」という語が見えるが，あるいはそのような典故があったのであろう。「龍劑犀膠，収來共伴灯煙」というのは，焼煙を原料とし，それに「龍劑」と，「犀」で作った膠とを混ぜ合わせて墨を作る製法について述べるものであろう。これも『天工開物』第16巻に「其増入珍料与漱金脚麝，則松煙油煙増減聽人」と見えている。墨に珍しい材料や鉱物系の材料，そして麝香などの香付けの材料を混ぜ合わせるが，それらの配分・調合は人それぞれ（「聽人」）であることが述べられている。詞の中で「煉修依法，印証隨人」というのも，その調合法が人それぞれであることを指すのであろう。墨の配合物については，『考槃余事』「墨箋」に鹿膠（鹿角膠）すなわち鹿の角で作った膠を加えることが見えており，「犀膠」というのは，文字通りならば犀の角で作った膠である。「龍劑」というのはよくわからないが，『負喧野録』に「墨のにおいのあるのは，多くは龍腦や麝香をいれている」という記述があり，あるいは龍腦を芳香剤として配合することをいうのであろうか。『遵生八牋』巻15「論墨」には，先に引いた「麝香月龍煤」の他に，「唐玄宗墨名龍香劑，致墨精幻，形李廷珪龍紋墨双脊墨，千古称絶」という記述が見え，「龍香劑」という呼び名が存在していたことがわかる。このように墨の製法を詠む詞の語句は，文房趣味に関する諸編纂の語句を散りばめており，また用語集としての正確さを有している。

「品秩多般」とは，墨にもランクがあることをいう。「老氏之玄」は，陳玄の玄と同じく墨の黒色を指す語だが，もとより『老子』河上公章句第1の「体道第1」に「同出而异名，同謂之玄，玄之又玄，衆妙之門」とあるのを踏まえる²⁰⁾。そしてそこから先秦の思想家の言葉に連想が飛ぶ。「楊家」は戦国時代の思想家，楊朱を指す。自己愛を中心とする学説を主張し，兼愛を主張する墨翟の学説と並び行われた。しかし『孟子』滕文公章句下には「揚朱墨翟之言，盈天下，天下之言，不歸揚則歸墨，揚氏為我，是無君也，墨氏兼愛，是無父也，無父無君，是禽獸也」と両者を批判する言葉が載せる²¹⁾。父親に仕えることを否定するような楊朱の唯我的言説も，君主に仕えることを否定するような墨子の兼愛的言説も，ともに儒家の正統を任ずる

孟子から見れば禽獣の行いに等しい。そして徐渭はこうした思想家の言葉を踏まえた上で、墨が朱と異なり儒家の側についたこと、すなわち墨が文人の愛玩品となったことを戯画的に述べるのである。思想家の名が朱と墨、すなわち赤と黒という色彩の対比となっているのは単なる偶然だが、『天工開物』第16巻が「朱」「墨」と並べて配置することを想起させるものでもある。

後関は、前関末尾の色彩を承けて、さらに色彩語を連ねる。「紅絲」は赤い糸だが、名硯の1つ、紅絲硯を指す。紅絲石は山東省青州市に産する石で、石質が赤黄色で糸のように赤い紋が入るため、こう呼ばれる。「玉版」は、光沢があり清浄な張りのある宣（剝）紙のこと。宋の蘇軾「孫莘老寄墨四首」に「溪石琢馬肝，剝藤開玉版」の句があり²²⁾、白い紙を玉の版に喩える発想が見て取れる。その紙の白色を承けて、「毫霜」という語で毛筆の毛の白さを点綴する。

その後は、実際に墨を磨る動作を描いている。「呵」は擬音語で、墨を硯で磨るときのカッという音であろう。硯池に水滴で水を注すと墨の濃淡が渦を巻き、あたかも蟠る龍が浮き出てくるように見えることを述べる。

その次の2句は意味がわかりづらい。「蒼蠅大」は、蠅の頭ほどの細かい字のことであろう。つまり墨のおかげで、小さいものでは細かい字から、大きいものでは道士の絵姿まで画くことができることを述べるのであろう。これは皇帝御前でのパフォーマンスをいうとは考えられないだろうか。末句が皇帝への万歳で締めくくられていることとも関連していよう。

16) 劍

欧冶良工，風胡巧手，鑄成射斗光芒。掛向床頭，蛟鱗入夢生涼。枕辺凜雪，匣内淒霜，英雄此際肝腸。問猿公，家山何処，在越溪旁。見說，胡塵前幾歲，秋高月黑，時犯邊疆。近日稱藩，一時解甲投韁。即令寸鉄堪銷也，又何勞，三尺提將。古人云，安處須防，但詰取，戎兵暇日，不用何妨。

「劍」

欧冶は良工，風胡は巧手，鑄造した劍は北斗の光芒を放つ。寢床に掛ければ，蛟龍が鱗を聳えさせ夢に入り涼を生む。枕元は凜雪の降るとく，匣の中は淒霜の降るとき，これ英雄の気概。猿公に問う，家山は何処にあるかと，越の溪谷のほとりに在り。

聞けば，胡塵の舞うは数年前，秋空に月黒き時，辺境を犯す。近頃は藩と稱し，一時甲冑を脱ぎ手綱を外す。たとえ小さな武器も売れるとしても，何の功勞あって，三尺の劍を提げ持つ。昔から言う，安寧に居る時ほど防ぐべしと，兵器を整え，暇日には，用いずとも構わない。

前関冒頭の「欧冶」「風胡」は、ともに劍を鍛える古代の名工の名前である。『越絶書』巻第11「越絶外伝記宝剑第12」の中に次のような、楚王の3枚の鉄劍の逸話が載せられている。楚王が風胡子を召し、「呉には干将がおり，越には欧冶子がいると聞く。いまこの2人に鉄劍を作ってもらいたいがどうか」と問う。風胡子は「善し」と答え，2人に会いに行き，鉄劍の製作を依頼する。そうして出来たのが「龍淵」「泰阿」「工布」という3枚の鉄劍であった（「楚王召風胡子而問之，曰，「寡人聞，呉有干将，越有欧冶子……因呉王請此二人作鉄劍，可乎」。

風胡子曰「善」。於是令風胡子之吳，見欧冶子・干將，使人作鉄劍。欧冶子・干將鑿茨山，洩其溪，取鉄英，作為鉄劍三枚。一曰龍淵，二曰泰阿，三曰工布」²³⁾。徐渭が風胡子和欧冶子を挙げて干將を挙げないのは、干將が呉の人物であるからであろう。

「射斗」とは、宝劍の背に星の連なっているような模様が出ることをいう。同じく『越絶書』巻11の「越絶外伝記宝劍」には越王勾踐が所有していた5枚の宝劍の話が載せられている。越王が相劍のできる薛燭という客を召し出し、手持ちの「毫曹」「巨闕」という名の劍を見せたところ、これは宝劍ではないと断じた。では、と「純鈞」という名の劍を見せたところ、これこそ宝劍と下へ拝し、劍の品評を述べ、これが純鈞であることを見破る。その品評の言葉が「觀其脈，爛如列星之行。觀其光，渾渾如水之溢於塘。觀其斷，巖巖如瑠石。觀其才，煥煥如水积」というものであった。ここで「爛たること列星の行の如し」と形容された紋様こそ北斗七星のごとく列する斑紋であり、徐渭の「射斗」という語の指し示すところでもある。ちなみに薛燭は、欧冶子が天の精神に因り、その技巧を尽くして作った大刑3小刑2の劍が「湛盧・純鈞・勝邪」の3枚と「魚腸・巨闕」の2枚であると述べてもいる（刑とは刀劍のこと）。これによれば、巨闕は小刑であるので宝劍とはみなされなかったことになる。そして純鈞は、越人の欧冶子が鍛えた大刑の1つであるから、まさしく越の宝劍であるといえる。徐渭が「劍」詞において純鈞にまつわる語句を典故として踏まえるのは当然であった。

「蛟」は、みずち。劍と龍との関わりは深い。しかし劍と龍の関連を網羅的に述べるのは本稿の意図するところではないので、ここでは『越絶書』に見える関連語句だけ指摘して、その一端を見ておきたい。さきほどの宝劍純鈞は、鍛えあがったとき「蛟龍捧鑑」（蛟龍が鑑を捧げもつ）と述べられている。また楚王の作らせた3枚の劍の1つ「龍淵」は、その名の由来として「觀其狀，如登高山臨深淵」と述べられている。高山に登り、その頂上から深く水を湛えた淵に臨むかの如き形状とはいかなるものか、觀念的すぎて具体的なイメージを結び難いが、その名が龍淵であるからには、深く水を湛えた蛟龍が棲む淵を思わせるような、見るものを引き込むような深みのある劍ということであろうか。なお『越絶書』の記述は『初学記』巻22「劍」にも見えている²⁴⁾。

「生涼」は、劍が冷気を生じるとする感覚を述べたもの。梁の呉均「詠宝劍」詩に「鏗辺霜凜凜，匣上風凄凄」と見え、「劍」詞の「枕辺凜雪，匣内凄霜」の典故ともなっている。「英雄」は、任侠の徒のこと。唐の郭震の「古劍歌」には「良工鍛鍊経幾年，铸得宝劍名龍泉。龍泉顔色如霜雪，良工咨嗟嘆奇絶。琉璃匣裏吐蓮花，錯鏤金環映名月。……非直結交遊俠子，亦嘗親近英雄人」と歌われている。良工が数年かけて鍛えあげた龍泉という宝劍は霜雪の如く白く、琉璃の箱に収めれば蓮の花のような紋様を浮き出させ、金銀の象嵌された柄は月光を受けて光り輝く……遊侠の徒と交わるのでなければ英雄の人と親しくなった、という内容である。ここにも龍泉という名の宝劍と遊侠、英雄との関係が示されている。この両首の詩はやはり『初学記』巻22「劍」の詩と歌に取られているものである。

「猿公」は、劍術に秀でた隠者を指す。後漢の趙曄の『吳越春秋』巻9「勾踐陰謀外伝」に「范蠡対曰，…今聞越有処女，出於南林，国人称善，願王請之，立可見。越王乃使使聘之，問以劍戟之術。処女将北見於王，道逢一翁，自稱曰袁公，問於処女，吾聞子善劍，願一見之。女曰，妾不敢有所隱，惟公試之。於是袁公即杖篠簞竹，竹枝上頡橋，未墮地，女即捷末，袁公則飛上樹，變為白猿，遂別去」という場面が見える²⁵⁾。越王は劍術を尋ねるため南方の林に住

む少女を召しだす。少女が北に向かう途中、袁公という名の老人と出会い、少女との手合わせを申し出る。竹林での空中戦を経て、袁公は白猿の姿を露呈して逃げさった、という逸話である。袁と猿が同音によるかけことば。白猿が女性を攫う故事は白話小説化されてもおりよく知られるが、ここでは逆に少女が白猿の化けた老人を追い払うという趣向となっている。このように猿公は、越の山林に棲み剣術に関わりのある登場人物であるといえる。なおこの逸話は『初学記』巻22「剣」には取られていない。剣そのものの製造、あるいは剣の持つ神秘性にまつわる逸話ではないからであろう。

このように前関は『初学記』という作詩教本に見える典故を使用しつつ、『越絶書』や『呉越春秋』などから徐渭の故郷である越に関連する剣の典故を集めた用語例集となっているといえる。

後関の語句も多くは典故を用いる。例えば「寸鉄」は、短い刃物、「三尺」は、剣のことであるが、『漢書』高帝紀下に「於是上嫚罵之、曰、吾以布衣提三尺取天下、此非天命乎、命乃在天、雖扁鵲何益」とあり、その顔師古注に「三尺、劍也」とあるのを踏まえている²⁶⁾。詞の「提將」は、手に掲げ持つことだが、これも高帝紀の「提三尺取天下」を踏まえている。

だが後関は、こうした典故の用例を集めることではなく、近時の史実を詠むことを目的とすると考えべきである。その鍵は、「近日、藩と称する」という語句にある。「胡塵」は、異民族の兵馬のたてる砂塵の意味で、北方遊牧系民族の侵攻を指す。徐渭の生きた明朝中期における北方情勢、いわゆる北虜の状況は、次のような経緯をたどった²⁷⁾。タタール部（韃靼）のダヤン・ハーンがモンゴル高原を統一し明朝と朝貢貿易を行うが、その死後、内紛により正常な関係が絶たれる。ダヤン・ハーンの孫アルタン・ハーンが勢力を強大化させると、貿易再開を求めてしばしば大同へ侵攻した。嘉靖29年（1550）には長城ラインを突破して北京を八日間にとり囲むこともあった。いわゆる庚戌の変である。隆慶4年（1570）にアルタン・ハーンの孫が投降して和議が成立する。明朝はアルタン・ハーンを順義王に封じ、大同などに馬市を設置し、モンゴルとの交易を認めたのである。「近日称藩」とは、この明朝政府がアルタン・ハーンを順義王に封じたことを指す。また「一時解甲投韉」の「韉」は馬を引く手綱のことであり、甲冑を解き手綱を投げるとは、モンゴル軍が武装を解除して、「一時」つまり一時的に和平が訪れたことを指している。

つまり後関は、明中期における朔北の辺境問題を詠じていることになる。そして、安穏な時にこそ守るべし、ということわざを引いた後、用いることがなくとも軍備を整えておくべし、というのが、この詞に托された徐渭の主張である。「詰取戎兵」は「詰戎詰兵」と読み、軍備を整治するという意味に解することができるだろう。

このように後関では、剣は単なる戦争の兵器としてしか考えられていない。前関で描かれたような古代の剣の持つ神秘性とは正反対の描かれ方である。なぜこのような描き方を徐渭はしたのであろうか。このことを考えるために、徐渭と朔北との出会いについて確認する必要がある。そのためには張元忭とこの代応制詞との関わりをあらためて整理しなければならない。

4. 徐渭と朔北・詞・張元忭とのつながり

現存する「墨」「剣」詞の2軸は両方ともに「応制」と題署されている。だが嘉靖19年

(1540)の県の童試復試で秀才に挙げられて以降、生涯、郷試に合格することのなかった徐渭の経歴を見れば、これら16首が代作であることは言うまでもない。むろん16首がすべて同じ時の作であるとは限らない。だがたとえ代作であろうとも、応制詞という種類の作品が作られるためには、やはり特殊な背景を必要とするのであり、随意に書かれるような種類のものではない。したがってある程度まとまった時期に作られたと考える方が妥当だろう。

作詞時期については、すでに前稿まで述べたが、ここであらためて確認しておく。11番「秋」詞の後関に「輕颺吹不斷，千尺虹流殿。報海屋，籌添算，良宵三五夕，仲月光逾滿。此時節，千官競祝吾皇誕（そよ風が吹き、虹が宮殿に懸かる。長寿を祝う，良き十五夜に，満月の光は満つ。この節句の日，百官競って吾が皇誕を祝う）」とあり，作詞時の皇帝の生誕が旧暦8月15日であることがわかる。これに該当する皇帝が万暦帝であることは、『明神宗実録』巻1に，万暦帝朱翊鈞が嘉靖42年陰暦8月17日酉の時に穆宗の第3子として生まれたと記述されていることから知られ，なおかつ明朝では万暦帝以外にこのような条件にあてはまる皇帝はいない²⁸⁾。つまりこれら16首は万暦即位年（1573）以降の成立と考えてよいのである。そして徐渭と交際があり，万暦即位以降に応制詞を皇帝に呈上する機会のある立場に居た人物としては，張元忭が最も適当である。

徐渭は張元忭の父，天復からの付き合いがあり，その秘書のような仕事を務めていた。徐渭は嘉靖45年（1566），妻を殺害した罪で獄に下されるが，隆慶5年（1571），張元忭が科挙試験の殿試に状元合格したとき，獄中から27番28番の祝賀の詞2首を作っている。隆慶6年（1572），穆宗が薨去し，神宗が即位して大赦が行われると，その年末に保釈出獄が認められ，翌万暦元年（1573）の元旦には天復の家へ行き拝謝している。陶望齡の「徐文長伝」に「獄事之解，張官論元忭力為多」とあるのを見れば²⁹⁾，このたびの出獄は，状元及第した張元忭の働きかけが大きかったことがわかる。万暦2年（1574），張天復が逝去，息子の張元忭が服喪のため帰郷する。翌万暦3年（1575）に，帰郷している張元忭の招きで『会稽県志』の編纂に加わり，その功績により完全に身の自由を得る。晴れて自由の身となった徐渭は，万暦3年5月から南京へ遊び，万暦4年（1576）4月に宣化巡撫，呉兌の招きを受け，北京，居庸関を経て8月に宣府へ到る。宣府は北方防衛のために置かれた明朝九辺鎮の1つである。ここで徐渭は生涯ではじめて北方辺境の風景を目にすることになる。宣府で新年を迎え，北京で療養していた時に李如松と知り合い，万暦5年（1577）秋に紹興へ帰る。万暦6年（1578）に張元忭は服喪の期限が満ちて帰京し翰林院修撰へ復職する。万暦8年（1580）春，馬水口參將，李如松の招きに応じて北京を経て馬水口へ赴き，北京へ戻ると張元忭の屋敷の近傍に住み，万暦10年（1582）に紹興へ帰る。陶望齡の「徐文長伝」では，北京で張元忭の屋敷に居た時のことを次のように語っている。

渭心徳之，館其舍旁甚驩好。然性縦誕，而所与処者頗引礼法，久之心不楽。時大言曰，「吾殺人当死，頸一茹双耳。今乃碎磔吾肉」。遂病発棄婦。

徐渭は張元忭の恩を心から徳とし，屋敷の傍らに住まわせてもらい，たいへん仲がよかった。だが徐渭の性格が放誕であり，状元合格者のお屋敷の堅苦しい礼法に縛られ，楽しくない思いをしており，「わたしは殺人者であるから処刑されて当たり前，いますぐこの身を碎いてくれ」

と大言し、発病したため出されて帰郷させられた、という内容である。もちろん、この真偽はわからない。だが張元忭は、徐渭にとってかけがえのない恩人であると認識されていたことには疑いが無い。徐渭は人生の恩人を記念するための人物表「紀恩」を書いている。だがそこにはたった3名しか挙げられていない。「張氏父子」は、「嫡母苗」（生みの母親の苗氏）と「績溪胡司馬」（幕客を勤めた太子少保、胡宗憲）と並ぶ1名（父子1組）である。したがって張元忭の屋敷近くにやっかいになり、翰林院修撰に復職した張元忭の代筆、代作の仕事を引き受けたことは確実であろう。つまりこれら16首は、張元忭復職後の、徐渭が北辺から帰る途上の北京滞在時と時間が重なる万暦8年から万暦10年の間に、滞在させてもらった張元忭のために代作、あるいは模擬的に代作した作品群であるとするのが最も妥当である。

そこで「劍」詞にもどると、そこに作詞時直前の朔北体験が色濃く反映されていることがわかる。徐渭は宣化巡撫の呉兌と知り合い、その招きで、北虜対策のために設けられた九辺鎮の1つである宣府へと赴き、北辺防衛の最前線を自らの目で見てきていたのである。またその時北京から南帰する際に、徐渭が「紀知」（知己についての人物表）に挙げた沈鍊（「沈丈純甫鍊」）の息子沈襄が、身に佩びていた日本刀を解いて徐渭に贈ったことがある。そしてその後、李如松の招きで馬水口へ赴き、それから北京の張元忭の屋敷の近傍に滞在したことは先述の通りである。そこで代応制詞を模擬創作しようと考え、三才の1つとして文人の文房趣味をテーマとしようと考えた。普通なら硯筆墨紙という文房四宝を4首の詞に仕立てるところであろう。そこに「劍」というテーマを入れることを思いついたのは、こうした徐渭自身の直前の朔北体験が大きく影響しているのではないか。そして「朔北イコール劍」という認識作用が作詞のときに働いたからこそ、「劍」詞後関のような表現が生まれたと考えられるのである。

もちろん徐渭が多分に遊侠の性格であったことは確かである。例えば「方山陰公墓表」に「渭自是好彈琴擊劍習騎射、逡巡里巷者十年」（わたくしは、琴を弾き、劍を撃ち、騎射を習うことを好み、町内をうろうろすること10年であった）と述べて、自らを遊侠・英雄として捉えていたことが知られる。劍は遊侠・英雄の必須のアイテムであった。前関の劍の神秘性への傾倒は、こうした性向が寄与していよう。つまり「劍」詞の前関は徐渭の個人的性向より語句が選ばれ、後関は徐渭の個人的経験から述べられているといえるのである。

5. まとめ

以上「鳳凰台上憶吹簫」を詞牌とする「研・筆・墨・劍」詞4首について訳注を試みてきた。そこから以下のような特徴を見出すことができる。

- ① 「研」詞を書くに当たっては、歙石硯・端溪硯・罈磯研・鼎研という、徐渭自ら収蔵した硯をもとにしていること。また詞に用いられた硯石の産地・採掘・鑑識に関する知識は正確であり、歴代の編纂書に載せられている硯に関する記述と一致する語句を用いていること。すなわち「研」詞は、硯の収蔵・鑑識の用語の系譜の中に位置づけられるに足る内容を有していること。
- ② 「筆」詞で述べられた水差・硯・墨・紙についての語句も知識として正確であること。「筆」詞全体が、韓愈の「毛穎伝」を本歌取りする作品であること。その中において徐渭の得意とする書体である行草書を点綴すること。

- ③ 「墨」詞も「毛穎伝」を踏まえた書き出しであり、「筆」詞から連続していること。先秦の諸子の言葉を踏まえながら、「毛穎伝」の擬人化表現を真似た戯作的表現を取っていること。また、墨の製法に関しても、諸書に見える正確な知識に基づいた語句を用いていること。
- ④ 「劍」詞は、前関は徐渭と張元忭の故郷である越の地方にまつわる古代の宝劍に関する典故を集めた用語集となっていること。だが後関は徐渭の個人的な体験に基づいた北方対策を献上する意図を持つこと。
- ⑤ 応制詞ゆえに、詞の末尾で皇帝への言辞を附すことは当然である。「研」詞では、鼎硯の形状から都を鎮護することを祝賀し、「筆」詞では、秦始皇帝で終わらせる「毛穎伝」の作者の韓愈を笑い、それとの比較で今上帝である万曆帝を言祝ぎ、「墨」詞では、直截に皇帝の永寿を祝い、最後に「劍」詞で、防備の必要性を諫言している。

天地人三才を満遍なく詠み込むという周到な意図のもとに、文人趣味がテーマとして選ばれたことは冒頭に述べた通りである。また恩人、張元忭のために構想した代応制詞がおろそかに作られたものではないことは、この4首からも伺えよう。

だが、より重視すべきなのは、これら4首が代応制詞として書かれながら、徐渭の個人的な要素が見受けられる点である。言語の創作的な営為が文学であるならば、その文学に作家の個人的な経験なり自己認識なりが反映されるのは当然であろう。それを作家の個性と呼べば、個性の表出が文学的創作であるともいえる。だとすれば、これら4首は、単なる皇帝の命令に応じるための詞の、しかも代作であるとして価値のないものと片付けてしまえるものではなく、むしろ創作的文学と呼びうるものである。この傾向は前2稿で見た通り、16首の他の詞にも多少とも見えるものであった。つまり代応制詞16首は創作として徐渭の文学の中に位置づけて評価すべきものである、ということが本稿のささやかな結論である。

徐渭の詞は全部で28首が現存する。今回検討を加えてきた代応制詞16首以外にまだ12首が残る。これら12首についても、現在までのところ文学として読まれることはあまりない。読まれたとしても「戯作的」と評価されるのみであり、そこに文学的価値を見出してはいない³⁰⁾。筆者は他のところで徐渭の詞に見える美人画や軍装の女性という形象について一部論じたことがある³¹⁾。未だ詳しく論じられていない徐渭の詞についての検討を含め、詞を徐渭の生涯とより積極的に関連させて読解の対象とし、その文学の中に位置付けて論じる必要があるが、それは今後の課題としたい。

註

- 1) 拙稿「徐渭の代応制詞16首について」北陸大学紀要第30号（2006）、2007年3月と「徐渭の代応制詞16首について（その2）—霜と雪、秋と冬、山と水の詞—」北陸大学紀要第31号（2007）、2008年3月。なお本稿には拙論別稿「徐渭の詞について—代応制と女性をテーマとする詞を中心に—」（刊行予定）と重なる部分があることをお断りしておく。
- 2) 「文房趣味」という用語で、筆硯紙墨を文房四宝として鑑賞、収蔵の対象とする行為と認識を指すことについては、村上哲見著『中国文人論』汲古書院、1994年3月取、「南唐李後主と文房趣味」（初出は荒井健編『中華文人の生活』平凡社、1994年1月）、青木正児著『琴碁書画』東洋文庫520、平凡社、1990年などを参照した。
- 3) 荒井健 他 訳注『長物志1～3』東洋文庫663・665・668、平凡社、1999年12月初版・2000年1

- 月初版・2000年3月初版を参照した。
- 4) 『洞天清祿集』以下の書物については、中田勇次郎訳『文房清玩一〜五』二玄社、1961年初版・1961年初版・1962年初版・1976年初版・1976年初版を参照した。
 - 5) 原文は「上自天文，下至地理，中及人物。精而礼学経史，粗而宮室舟車，幻而神仙鬼怪，遠而奔服鳥章，重而珍奇玩好，細而飛潜動植」。テキストは上海古籍出版社、1985年8月、上海図書館蔵明万曆王思義校正『三才図会』影印本による。
 - 6) 徐渭の作品の引用は、中国古典文学基本叢書『徐渭集』中華書局、1983年による。特に断らない限り、このテキストを底本として使用する。
 - 7) 徐渭の年譜については、梁一成著『徐渭の文学与芸術』台北芸文印書館、民国66年、附録1年譜を参照した。
 - 8) 『洞天清祿集』のテキストは、『欽定四庫全書』台湾商務印書館発行、第871冊収録『洞天清祿』影印本による。
 - 9) 『長物志』のテキストは、『欽定四庫全書』台湾商務印書館発行、第872冊収録『長物志』影印本による。
 - 10) 註4上掲の『文房清玩四』宋人硯譜十種に訳出された『硯録』を参照した。
 - 11) 註4上掲の『文房清玩二』に訳出された『考槃余事』を参照した。
 - 12) 『論語』のテキストは、『四部叢刊』収録『論語集解』影印本による。
 - 13) 『西京雜記』のテキストは、『四部叢刊』収録『西京雜記』影印本による。
 - 14) 『遵生八牋』のテキストは、註8上掲の『四庫全書』第871冊収録影印本による。
 - 15) 『負暄野録』のテキストは、註8上掲の『四庫全書』第871冊収録影印本による。
 - 16) 杜甫の詩のテキストは、中国古典文学基本叢書『杜詩詳註』巻11、中華書局、1979年初版排印本による。
 - 17) 韓愈の文のテキストは、『四部叢刊』収録『昌黎先生集』影印本の巻第36雜文による。
 - 18) 中国書法精粹、浙江人民美術出版社、2003年収影印版を参照した。
 - 19) 『天工開物』のテキストは、『中国古代版画叢刊3』上海古籍出版社、1988年収録、崇禎10年刊本影印本による。また訳については、薮内清訳注『天工開物』東洋文庫130、平凡社、1969年を参照した。
 - 20) 『老子』のテキストは、『四部叢刊』収録『老子道德経』影印本による。
 - 21) 『孟子』のテキストは、『四部叢刊』収録『孟子』影印本による。
 - 22) 蘇軾の詩のテキストは、中国古典文学叢書『蘇軾詩集合注』巻25、上海古籍出版社、2001年6月排印本による。
 - 23) 『越絶書』のテキストは、『四部叢刊』収録『越絶書』影印本による。
 - 24) 『初学記』のテキストは、民国50年の司義祖の前言を持つ活字本による。
 - 25) 『呉越春秋』のテキストは、『四部叢刊』収録『呉越春秋』影印本による。
 - 26) 『漢書』のテキストは、中華書局、1962年初版排印本による。
 - 27) 以下の明朝とモンゴルとの関係については、岸本美緒 他 著『明清と李朝の時代』（世界の歴史12）、中央公論社、1998年、阪倉篤秀著『長城の中国史』講談社メチエ、2004年などの諸書を参照した。
 - 28) 詳細については拙稿その2を参照されたい。
 - 29) テキストは註6上掲の『徐渭集』附録による。
 - 30) 註7上掲の梁書第3篇「詩与詞」に見える評価による。
 - 31) 註1上掲の拙論別稿を見ていただければ幸いである。

(完)